

【調査報告】

絵画統覚検査 (CAT) からみた 学童保育と保育園児の母子関係と QOL

井谷 有希*, 谷向 みつえ**

Mother-Child relationship and QOL of after-school care and nursery school children
from the perspective of Children's Apperception Test (CAT.)

Yuki Itani and Mitsue Tanimukai

要 旨

近年、母親の就業率の増加に伴い、乳幼児の保育や小学生の放課後児童クラブ（学童保育）を利用する子どもが急増している。それに伴い子どもが家庭外で過ごす時間は益々長くなり、親子が家庭で共に過ごす時間は減る一方にある。この状況を子どもがどのように受け止めているのかを、投影法の幼児・児童絵画統覚検査（CAT）から把握し、子どもが母親に抱く表象と QOL と自己意識との関連から検討した。対象は就学直前の年長児から小学3年生までの72名（男児38名、女児41名）で、幼児・児童絵画統覚検査の図版3と7、小学生版 QOL 尺度（柴田, 2012）、自己意識の発達力動過程の検査（都筑, 1981）、グッドイナフ人物画知能検査新版（小林, 2017）を個別に実施した。CATの反応分類の結果から、安定的・非安定的母子関係の反応以外に、分離不安を投影した反応を示す小学生が約半数いた。また、安定した母子関係を投影した子どもは現在の自己への満足度と未来への期待が高く、否定的関係を投影した子どもは QOL の自尊感情が低い結果が得られた。グッドイナフ人物画知能検査新版と CAT の分析から、精神発達と母子表象に関連は見られなかった。

Abstract

In recent years, with the increase in the employment rate of mothers, the number of children who use childcare for infants and after-school children's clubs (school childcare) for elementary school children is increasing rapidly. As a result, children spend more and more time outside the home, and parents and children spend less time together at home. We assessed how children perceive this situation from the children's apperception test (CAT) which is a projective test and analyzed the relationship between the representation that the child has for the mother, QOL, and self-consciousness. The participants were 72 children (38 boys, 41 girls; from 5-year-old children just before school to the third grade of elementary school, using the CAT (No.3 & 7), the elementary school version QOL scale (Shibata, 2012), self an examination of the dynamic process of consciousness development (Tsuzuki, 1981) and a new edition of the Goodenough draw-a-man test (Kobayashi, 2017). From the classification of the CAT assessment, about half of the elementary school students

受付日 2020. 9. 11 / 受理日 2021. 1. 18

*和歌山県スクールカウンセラー / **関西福祉科学大学 心理科学部 教授

showed a reaction that projected separation anxiety in addition to the positive / negative mother-child relationship. In addition, children who projected a stable mother-child relationship were highly satisfied with their current self and had high expectations for the future, and children who showed a negative relationship had low QOL self-esteem. Analysis of the new version of the Goodenough draw-a-man test and CAT showed no relationship between mental development and mother-child representations.

● ● ○ **Key words** 母子関係 Mother-child relationship / 学童保育 after school day care / 分離不安 separation anxiety / 幼児・児童絵画統覚検査 (CAT) Children's Apperception Test (CAT) / QOL

I. 問題

近年、母親の就労の増加に伴い家族の生活形態が変わり、乳幼児や児童が家庭で親と過ごす状況に変化が見られるようになってきた。厚生労働省の国民生活基礎調査 (2017) では母親の就業率は年々増加し、平成 29 年には 18 歳未満の子どもがいる家の母親の就業率は 70.8% と過去最高になった。中でも、0 歳児をもつ母親の就業率も 42.4% にまで急増し、乳幼児の母親の約 4 割が何らかの形で就労している状況にある。また放課後児童クラブ (学童保育) に登録している留守家庭の小学生は 117 万人 (内、96 万人余りが低学年) を超え、待機児を抱えるほどである (厚生労働省, 2018)。さらに、内閣府の調査 (2008, 2018) によると、労働時間が長時間化することによって親の帰宅時間が遅くなり、平日の親子の接触時間が減少していることが指摘されている。就労している母親と専業主婦として家庭にいる母親とでは、子どもが母親と接する時間に差が生じることが推測される。

このような親子の状況は子どもの発達にどのような影響を与えるのだろうか。小松 (2003) は、母親が母子間の会話を肯定的な経験を共有する場として捉えている場合、子どもの自己・他者の理解、さらにはその後の他者とのかわりに影響することを明らかにしている。また、会話の量 (時間) は子どもの学習時間の増加につながるとも言われている (木村, 2009)。このように、時間に裏付けられた親子の関わりは親子の関係性を規定し、さらに子どもの心理社会面の発達に影響を与えられ考えられる。

親子の関係性を考える時、アタッチメントの形成は非常に重要な概念である。アタッチメントとは、危機

的状况においてアタッチメント対象との接近を求める行動に現れるような母子間の結びつきのことであり、アタッチメントに関する内的作業モデルの形成により、自己や他者への信頼感や安定した対人関係を築く基礎が形成され、他者との関係性の質に影響を与える (Bowlby, 1969)。この内的作業モデル (以下、IWM) はアタッチメント対象が目前に存在する時も不在の時も対象の行動を予測し、実際の (あるいは想像上の) 相互作用行動をガイドするといったシミュレーション・モデルの意味合いを含んでいる (久保田, 1995)。例えばアタッチメント対象である母親が子どもの意図や行動に対してどう反応したかという関わり方の歴史の反映が IWM で、子どもはアタッチメント対象との具体的な経験を蓄積して IWM を形成する。

Kerns (2008) は、児童期の子どもは仲間との親密な関係を拡張させ、状況に応じて異なる対象を安全基地として受け入れることができるようになるが、主要なアタッチメント対象は養育者のままであることが多く、児童期でも養育者とのアタッチメント関係は重要であると述べている。幼児期に形成されたアタッチメントは児童期に安定し、思春期・青年期においても重要な意味を持つようになる。しかし、児童期前期は小学校入学などの新しい環境への適応など新しい課題があるにもかかわらず未だ IWM が定着しているとは言えない。谷口 (2016) は子どもが過去の出来事を語る際に、親が子どもたちの試みていることに敏感に気付いてあげることで、自己、親、社会、世界についての IWM の良好な働きを向上させ、そのことが安定したアタッチメントタイプを育むことにつながると述べている。つまり、親の敏感さや的確な情緒応答性は安定型のアタッチメントを育み、心身の発達において重要

な要因と言え。また、安定した IWM の形成はアタッチメント対象との分離にも耐えることができるが、安定的に機能していないと日常生活に支障をきたすほどの分離不安を生じることもある。

このように幼児期から児童期にかけて、どのような IWM を形成するのかが重要であるが、子どもが対象であるためにその測定は難しい。久保田 (1995) は、4 歳児の CAT 図版の自由反応から表象レベルのアタッチメントを分類することの妥当性を示している。また、久保田のコーディング基準を参考にして、駒田・別府・宮本 (2001) も 3、4 歳児の CAT の図版 3 と 7 を愛着の IWM の反映として分類を試みている。そこで本研究でも質問紙や行動を媒体とするのではなく、投影法によって子どもの母子関係の表象を捉えることを試みることにする。

子どもの発達を捉えるもう一つの視点として、関係性を土台として育まれる自己意識が挙げられる。自己意識とは他者や外界と区別された自我として自分を意識することである。都筑 (1981; 1983) は、自己意識の健全な発達には、子どもが自身の現在の生活と未来の生活の両方が豊かなものとして認識していることが重要であると述べている。そして、子どもの自己意識を把握するために、Zazzo (1960) のベスティエール検査を基にして自己意識の発達の力動過程の検査 (以下、自己意識検査) を作成し幼児から児童期の子どもを対象に調査した。ベスティエール検査とは、子どもの情緒的発達の障害を診断するために考案されたものであり、病理学的・発生的・差異的視点から子どもの日常的な意識や態度を検討し、子どもの社会的・情緒的な発達水準を明らかにしようとするものである。ベスティエール検査の特徴は、子どもの自己意識を、子どもが自分自身の発達について抱いている意識や自己の成長への欲求という側面から力動的に把握できる一種の投影法という点にある。自我形成には「自分はこれでよい」と感じたり自己の価値を見出したりすることが必要不可欠である。また、子どもの自我形成には親の養育態度の影響が大きいと考えられている。戸田 (1990) は、親の実際の態度 (客観的環境) と認知された親の態度 (主観的環境) は子どもの自我形成に直接的・間接的に影響を与えることを明らかにした。つまり親との関係性は子どもの自己意識の発達に影響すると言え。

さらに、子どもの心身の健康の指標の 1 つに、Quality of life (以下、QOL) がある。QOL とは、健康の心理的指標であり、日々の生活の中で個人の機能的な能力も考慮に入れた心理・社会的なモデルから発した概念 (古荘・柴田・根本・松壽, 2014) である。Koot (2001) は、子どもの QOL について、普遍的な人間の権利に基づく、その子どもの文化と時代の中で生活の複数の領域における主観的かつ客観的 well-being であると論じている。一方 Schipper, Clinch & Olweny (1996) は、子どもの QOL 概念は身体的・認知的機能、心理的 well-being、社会的な関係の領域を中心とした日常的機能の領域から捉えるべきであり、well-being にかかわる子どもの主観的評価こそが QOL の測定に最も重要であると述べた。古荘ら (2014) はそれらの考えを受け、子どもの QOL とは身体的、心理的、社会的側面から日常的機能の複数の領域における客観的かつ主観的 well-being であると結論づけている。これらのことから、家族内での関わりも子どもの QOL に大きく関係すると推測される。

幼児期から児童期における母子関係の先行研究は、母親への調査や子どもへの行動観察に基づいているものが多い。しかし、Bowlby (1969) が子どもの心的表象としてアタッチメントを概念化していることを踏まえると、子どもに対して母子関係の質を表象から捉える研究手法をとることは重要と考えられる。そこで本研究では投影法の CAT、ならびに自己意識検査を用いて、保育所や学童保育の子どもの母子関係の表象と QOL、自己意識との関連を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象者

調査対象者は、幼保連携型認定こども園の年長児 27 名、同園付設の学童保育に通所する小学校低学年 52 名 (1 年生 22 名、2 年生 20 名、3 年生 10 名) の合計 79 名であった。対象者の内訳は、男児 38 名 (年長 15 名、1 年生 8 名、2 年生 8 名、3 年生 7 名)、女児 41 名 (年長 12 名、1 年生 14 名、2 年生 12 名、3 年生 3 名) であった。平均年齢は、男児が 7.13 歳 ($SD = 1.14$)、女児が 7.12 歳 ($SD = 0.95$) であった。なお、

本研究において年長児は小学校入学直前の時期に調査を行っているため、調査対象者全体を表す場合には小学生と年長児を合わせて「子ども」と表記する。

2. 調査方法

調査時期は2018年2月から3月、自由保育の時間と学童保育の時間に別室で個別に対面調査を実施した。子どもとの面接はラポールを形成するために軽く雑談をしてから聞き取りを開始した。聞き取りに配慮が必要な家庭の子どもは事前に園から情報を得て配慮した。子どもと対話をしながら回答データを収集するため、園長の許可を得て録音を行った。

3. 調査内容

(1) 幼児・児童絵画統覚検査図版日本版 (戸川, 1955)

幼児・児童絵画統覚検査図版日本版 (以下、CAT) は、登場人物がすべて動物で描かれた日常生活の葛藤場面の図版を提示し、リスのチロを主人公としてストーリーを作成するように求める投影法である。Bellak (1971) は、子どもは人間よりも動物により同一視しやすく、CATにおいて被験児が語るストーリーの中の主人公は本質的には被験児自身であると述べている。この仮説に基づいて、CATは子どもが親やきょうだいなどの重要な人物との関係についての理解を深めることを目的としてデザインされている。

本研究では駒田・別府・宮本 (2001) に倣い、家庭内における様子を表した図版3と、保育園の分離場面における様子を表した図版7を用いた。各図版の内容と着目点を以下に示す。《図版3》

親リスが赤ちゃんリスを抱っこしており、その右横に子リスが立って見ている場面である。親リスは右横の子リスの方向に手を伸ばしているが、この手ぶりは“こっちにおいで”と招いているのか、あるいは接近することを拒否・禁止しているのか、その意味については多義的である。ここで登場する3匹のうち、どれを主人公チロと見なし他のリスとの関係をどのように語るのか、赤ちゃんと母、きょうだいの3者の関係からきょうだい葛藤と退行に着目した。《図版7》

園庭ではリスが他の動物達と一緒に遊戯をしている。門の外では子リスが園に背を向けて親リスと手を取り合っている、他にも勝手なふるまいをしているリスがいる場面である。この図版は、どのリスをチロと

するかに着目することによって園への適応・不適応、園への関心が投影される。また、門の前のリスと大人のリスとの関係をどのように語るのかを、本研究では母子分離場面のアタッチメントの観点から着目した。

CATの実施方法は子どもによる自発的な発話を記録するのが本来の手法であるが、本調査の対象には幼児が含まれ、自分自身の言葉で図版の説明することが難しいため、「チロちゃんはこの絵のどこにいるかな?」、「じゃあこの(他のリスを指さして)リスは誰かな?」、「チロちゃんは今なにをしているところなのかな?」、「このリス(他のリスを指さして)とチロちゃんはどんなお話をしてる?」など、子どもの状況に応じて質問をして反応を促した。図版は3、7の順に提示し、逐語録を作成した。

(2) 小学生版 QOL 尺度 (柴田, 2012)

柴田 (2014) が「Kid-KINDL[®]」翻案の妥当性と信頼性を検証して作成した小学生版 QOL 尺度を使用した。本研究では負担を減らすために、6つの下位領域得点のうち、身体的健康を除いた精神的健康、自尊感情、家族、友だち、学校生活の5つの下位領域得点と QOL 総得点を算出した。また、入学前の年長児を含むため「学校」の授業やテストに関する2項目を除外し、計18項目を用いた。回答は「ぜんぜんない」「ほとんどない」「ときどき」「たいてい」「いつも」の5段階評定で、大きさの違う5種類の丸を描いた図版を見せて、自分の気持ちに一番近いものを指で差すように求めた。QOLの総得点および下位領域得点は原版に基づいて100点満点に換算した。

(3) 自己意識の発達の手動過程の検査 (都筑, 1981)

子どもの自己意識を把握するために、Zazzo (1960) のベストイエール検査を基に都筑 (1981) が作成した自己意識の発達の手動過程の検査 (以下、自己意識検査) を用いた。ベストイエール検査とは、子どもの情緒的発達の障害を診断するために考案されたものであり、病理学的・発生的・差別的視点から子どもの日常的な意識や態度を検討し、子どもの社会的・情緒的な発達水準を明らかにしようとするものである。ベストイエール検査の特徴は、子どもの自己意識を、子どもが自分自身の発達について抱いている意識や自己の成長への欲求という側面から力動的に把握できる一種の投影法という点にある。検査は8項目の質的な質問 (Table 1) で、分析は都筑 (1981) に依拠して質問ご

Table 1 自己意識検査の質問項目 (都築, 1981)

①あなたはもう一度赤ちゃんになりたいですか。
②あなたは大人になりたいですか。
③(現在の年齢の)自分は気に入っていますか(満足していますか)。
④すぐに1歳年をとり、大きくなりたいですか。
⑤早く大きいおにいさん(おねえさん)になりたいですか。
⑥早くおとなになりたいですか。
回答方法(はい・いいえ)
⑦もし、どんなとしにでもなれるとすれば、次のうちどれが一番なりたいですか。回答方法(赤ちゃん・おとな・今のまま)
⑧1年前の()組のときと今を比べたとき、あなたは、たくさん変わった、少し変わった、あまり変わらないのうちどれですか。
回答方法(たくさん変わった・少し変わった・あまり変わらない)

とに検討した。

Ⅲ. 結果

(4) DAM グッドイナフ人物画知能検査新版 (小林・伊藤, 2017)

1. CAT 図版の反応分類

子どもの精神的な発達の指標として、グッドイナフ人物画知能検査新版を用いた。「人の絵をひとり描いてください。頭から足の先まで全部描いてね」と教示した後、白紙と黒鉛筆を渡し、描いた後に誰の絵かを聴取した。発達年齢は2017年に再標準化された採点基準(小林・伊藤, 2017)に遵い査定した。

(1) CAT 図版3の反応の分類

駒田ら(2001)は、CAT 図版3の反応を母子関係に着目して「Holding」「肯定的関係」「否定的関係」「かかわり欠如」「母親不在」「願望」「わからない」の7群に分類した。本研究では「かかわり欠如」1名、「わからない」の反応がなかったため、かかわり欠如は「否定的関係」に含め5群に分類した。また、登場人物に出てくる養育者が父親のみの子ども(5名)は、いずれも両親がいる家庭の子どもであったため駒田らに倣って「母親不在」に分類した。各分類の説明と反応例、反応数をTable 2に示す。

4. 倫理的配慮

本研究は、関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号:17-47)。調査は事前に園と相談の上、園長の代諾を得て実施した。また、子どもにも本調査の目的、プライバシーの保護、実験を中断する権利について平易なことばで説明し同意を得てから開始した。

さらに駒田らは「Holding」「肯定的関係」をポジティブな母子関係を示す母子関係安定群、「否定的関係」「母親不在」「願望」をその他群の2群に分類している。しかし「願望」は非現実的なポジティブな母子関係を反映した反応と捉えることができるため、本研究では願望群を「否定的関係」「母親不在」とは別にし、「Holding」「肯定的関係」の安定群、「否定的関係」「母親不在」の非安定群、願望群の3群に分けて

Table 2 CAT 図版3の反応分類の説明と反応者数(%)

分類	分類説明(駒田・別府・宮本, 2001)	人数(%)	
		5分類	3分類
Holding	抱かれているリスを主人公、抱いているリスを母親とする。 例:『お母さんがチロちゃんを抱っこしてる』	15 (19.0)	〈母子関係安定群〉 43 (54.4)
肯定的関係	抱いているリスを母親、見ているリスを主人公としその関係を肯定的に捉えている。 例:『お母さんチロちゃんにおいでって言ってる』	28 (35.4)	
否定的関係	母親との関わりが拒否的である、または母親との関係が叙述されていない。例:『お母さんがあっち行ってって言ってる』『しゃべってない』	15 (19.0)	〈非安定群〉 24 (30.4)
母親不在	登場人物に母親が叙述されない。(※父親のみの叙述も含む) 例:『チロちゃんが妹をだっこしてる』『パパとチロちゃん』	9 (11.4)	
願望	自分に弟や妹がいるにも関わらず、抱かれているリスを主人公(自分)としている。	12 (15.2)	〈願望群〉 12 (15.2)

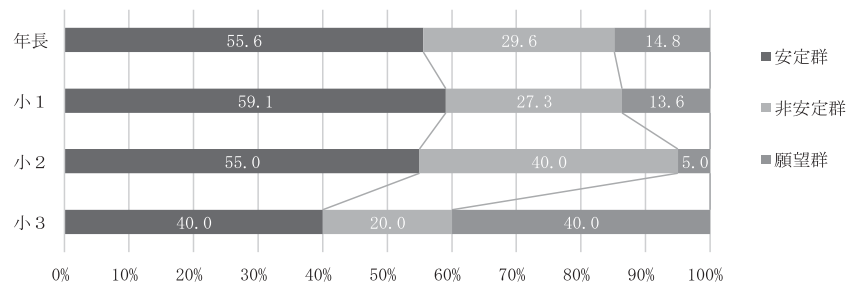


Figure 1 学年別 CAT 図版 3 の反応

Table 3 CAT 図版 7 の反応分類の説明と反応者数 (%)

分類	分類説明 (駒田・別府・宮本, 2001)	人数 (%)	
		5 分類	3 分類
分離・再会	分離または再会の場面として捉え、母子の対話が肯定的に叙述されている。例：『いつてらっしゃって言われて、いつてきますって言ってる』	16 (20.3)	〈母子関係安定群〉 24 (30.4)
会話	分離または再会の場面であると判断されないが、母子の肯定的な会話が叙述されている。例：『晩ごはん何にしようかって話してる』	8 (10.1)	
要求拒否	母親への要求を拒否される。 例：『まだ遊びたいって言ったらダメって言われた』	8 (10.1)	〈非安定群〉 18 (22.8)
母親不在	登場人物に母親が叙述されない。 例：『チロちゃんが妹のお迎えにきた』	10 (12.7)	
分離不安	母親と離れるのを嫌がっている。 例：『お母さんとバイバイいやって言ってる』	37 (46.8)	〈分離不安群〉 37 (46.8)

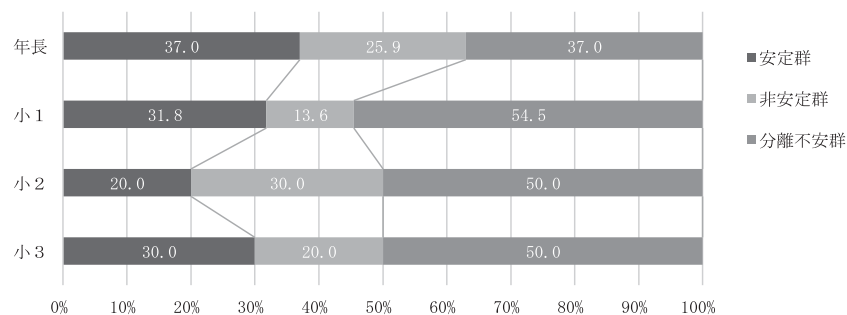


Figure 2 学年別 CAT 図版 7 の反応

分析を進めることにした。安定群は 43 名、非安定群は 24 名、願望群は 12 名であった。

学年別の反応者比率を Figure 1 に示す。発達的变化を検討するため、学年と反応 3 群の χ^2 検定を行ったが何れも有意差はなかった ($\chi^2(6) = 6.974, p = .323, n.s.$)。

(2) CAT 図版 7 の反応分類

図版 7 は、母親と子リスの関係の捉え方に着目して「分離・再会」「会話」「要求拒否」「分離不安」「母親不在」の 5 群に分類した。「わからない」の回答がなかったため、本研究では分類のカテゴリから除外した。5 群の説明と反応例、反応数を Table 3 に示す。

さらに、駒田らはこれらを「分離・再会」「会話」をポジティブな母子関係を表す母子関係安定群、「要求拒否」「母親不在」「分離不安」をその他群の 2 群に

分けた。本研究では反応例から、分離不安を要求拒否、母親不在とは別の心性と捉え、「分離・再会」「会話」の母子関係安定群、「要求拒否」「母親不在」の非安定群に加えて、分離不安群を設けて 3 群で分析を進めることにした。その結果、母子関係安定群 24 名、非安定群 18 名、分離不安群 37 名であった。

学年別の反応者比率を Figure 2 に示す。発達的变化を検討するため、学年と反応 3 群の χ^2 検定を行ったが有意差は得られなかった ($\chi^2(6) = 3.432, p = .753, n.s.$)。

2. QOL 得点と CAT の反応との関連

(1) QOL 得点の記述統計

QOL 総得点と各領域得点の全体、ならびに男女別と学年別の平均値を Table 4 に示す。分散分析の結

Table 4 QOL 総得点・下位領域得点の平均値 (SD)

	全体 n = 79	男児 n = 38	女児 n = 41	年長 n = 27	小1 n = 22	小2 n = 20	小3 n = 10	F 値・t 値 多重比較
QOL 総得点	74.07 (13.41)	72.63 (15.86)	75.41 (10.69)	78.64 (10.562)	76.81 (10.82)	67.78 (15.06)	68.33 (16.72)	F (3,75) = 3.79* 年長>小2
精神的健康	70.17 (20.94)	68.09 (22.97)	72.10 (18.96)	74.54 (19.53)	73.01 (20.08)	65.31 (21.60)	61.88 (23.84)	n.s.
自尊感情	78.05 (19.53)	76.48 (21.08)	79.50 (18.12)	77.43 (19.07)	84.94 (12.60)	71.88 (24.12)	76.88 (21.26)	n.s.
家族	68.72 (18.37)	69.08 (18.99)	68.38 (18.01)	74.91 (20.03)	70.74 (14.74)	61.25 (16.92)	62.50 (19.09)	F (3,75) = 2.77* 年長>小2
友だち	73.51 (15.95)	73.22 (17.23)	73.78 (14.87)	81.16 (11.66)	73.18 (17.18)	66.56 (13.64)	67.50 (20.16)	F (3,75) = 4.29** 年長>小2
学校生活	85.76 (20.78)	79.93 (23.88)	91.16 (15.87)	91.67 (12.50)	87.50 (19.67)	80.00 (22.36)	77.50 (32.70)	t (63.626) = -2.440* 女児>男児

**p<.01, *p<.05

果、QOL 総得点、友だち、家族に学年別の主効果が認められ、多重比較により年長児が2年生よりも得点が高いことが明らかになった ($F(3,75) = 3.53, p < .05$; $F(3,75) = 4.02, p < .01$; $F(3,75) = 2.77, p < .05$)。また t 検定より学校生活は女児が男児よりも平均値が高いことが明らかになった ($t(63.626) = -2.440, p < .05$)。

(2) CAT の母子関係の分類と QOL 得点の関連

CAT と QOL との関連を検討するために、CAT 図版3の5群で一元配置分散分析を行った結果、QOL の総得点と自尊感情で主効果が認められた ($F(4,74) = 2.92, p < .05$; $F(4,74) = 3.14, p < .05$)。多重比較より総得点は肯定的関係群と否定的関係群に有意差があり、CAT で肯定的関係を示した子どもは、否定的関係を示した子どもよりも得点が高かった。また自尊感情は、肯定的関係群・母親不在群と、否定的関係群に有意差があり、肯定的関係を示した子ども、ならびに

語りに母親が出現しない子どもは、否定的関係を語った子どもよりも得点が高かった。学校生活得点の主効果にも有意傾向がみられたが、多重比較の結果は5群に有意差はなかった (Table 5)。なお、CAT 図版3の3群に QOL 得点の有意差はなかった。

次に、CAT 図版7の5群で QOL 各得点の分散分析を行ったところ、QOL の自尊感情と学校生活で主効果が認められた ($F(4,74) = 3.425, p < .05$; $F(4,74) = 3.507, p < .05$)。多重比較の結果、肯定的会話群は分離不安群よりも得点が高かった (Table 6)。

CAT 図版7の3群で QOL 各得点の分散分析をしたところ、QOL の家族で主効果が認められた ($F(2,76) = 3.39, p < .05$)。多重比較の結果、非安定群と分離不安群に有意差があり、非安定群の子どもの方が、分離不安群よりも家族得点は高く、分離不安群は家族得点が低かった。

Table 5 図版3の反応分類と QOL 得点の平均値 (SD)

	1. Holding n = 15	2. 肯定的 n = 28	3. 否定的 n = 15	4. 母親不在 n = 9	5. 願望 n = 12	F 値	多重比較
QOL 総得点	72.10 (8.53)	73.47 (7.01)	64.40 (14.35)	75.18 (7.60)	71.17 (7.33)	2.92*	2>3
精神的健康	15.00 (3.60)	15.57 (3.07)	14.53 (4.19)	15.56 (3.40)	15.33 (2.84)	.266	
自尊感情	16.63 (3.54)	17.21 (2.18)	14.33 (4.01)	18.11 (1.96)	16.08 (2.87)	3.14*	2・4>3
家族	15.93 (3.15)	15.09 (2.79)	13.20 (2.78)	15.44 (3.17)	15.50 (2.50)	2.03	
友達	15.80 (2.65)	16.20 (2.17)	14.33 (3.20)	16.73 (1.69)	15.75 (2.53)	1.78	
学校生活	8.733 (1.39)	9.39 (1.03)	8.00 (2.62)	9.33 (1.41)	8.50 (1.51)	2.12†	

*p<.05, †p<.10

Table 6 図版7の反応分類と QOL 得点の平均 (SD)

	1. 分離・再会 n = 15	2. 肯定的会話 n = 28	3. 要求拒否 n = 15	4. 養育者不在 n = 12	5. 分離不安 n = 9	F 値	多重比較
QOL 総得点	71.74 (18.32)	79.51 (9.64)	77.60 (14.78)	78.97 (10.47)	71.82 (11.76)	.320.	
精神的健康	67.58 (22.73)	76.56 (22.35)	79.69 (16.62)	72.50 (19.36)	67.23 (21.16)	.487	
自尊感情	70.12 (25.08)	89.84 (7.42)	80.47 (18.43)	83.13 (15.04)	77.03 (19.04)	3.425*(a)	2>5
家族	69.92 (24.39)	68.75 (8.18)	75.78 (27.02)	78.50 (18.61)	64.02 (13.45)	1.614	
友達	75.78 (20.52)	74.22 (17.50)	71.09 (17.34)	75.63 (12.66)	72.33 (14.53)	.928	
学校生活	78.91 (31.20)	96.88 (5.79)	84.38 (18.60)	91.25 (16.72)	85.14 (18.12)	3.507*(a)	2>5

a 漸近的 F 分布; * $p < .05$

3. 自己意識と CAT 母子関係の表象との関連

(1) 自己意識検査の記述統計

自己意識検査の回答数と比率を Table 7 に示す。自己意識の発達の変化を把握するために学年との χ^2 検定を行ったが、各項目の回答と学年による有意差はみられなかった。

(2) 自己意識検査と CAT の反応分類との関連

自己意識検査の「もし、どんな年にでもなれるとすれば、どれが一番なりたいですか」と CAT 図版3の3群の関連を χ^2 検定でみたところ有意差がみられ残差分析の結果、非安定群は「赤ちゃん」が多く「今のまま」が少なく、安定群は「今のまま」が多かった ($\chi^2(4) = 11.363, p < .05$)。また5群との χ^2 検定と残差分析の結果、母親不在に「赤ちゃん」が多かった ($\chi^2(8) = 15.631, p < .05$)。

「もう一度赤ちゃんになりたいですか」と、図版7の5群の χ^2 検定と残差分析の結果、母親不在は「はい (赤ちゃんになりたい)」が多く「いいえ」が少なく、要求拒否は「いいえ」が多く「はい」が少なかった

($\chi^2(4) = 11.367, p < .05$)。

「早く大きいお兄さん・お姉さんになりたいですか」と、図版7の3群との χ^2 検定と残差分析の結果、有意傾向がみられ、安定群に「はい (お兄さん・お姉さんになりたい)」の回答が多く「いいえ」が少なかった ($\chi^2(2) = 5.052, p < .10$)。

「現在の自分に満足していますか」と図版3の5群の χ^2 検定の結果、肯定的関係に「はい (満足している)」が多く「いいえ」が少なかった ($\chi^2(4) = 8.211, p < .10$)。

これらの結果から、CAT の反応の肯定的関係や母子関係安定群に「今のまま」あるいは「お兄さん・お姉さん」になりたいや「今の自分に満足をしている」という回答が多く、肯定的自己意識を持つ子どもが多いことが示された。一方、非安定群や母親不在に「赤ちゃん」になりたいと回答する子どもが多かった。

4. 自己意識と QOL との関連

自己意識検査の回答 (わからないを除外した「はい」と「いいえ」) 別に QOL 得点の平均値を t 検定

Table 7 自己意識検査の回答人数 (%)

	はい	いいえ	わからない
①もう一度赤ちゃんになりたいか	26 (32.9)	52 (65.8)	1 (1.3)
②大人になりたいか	69 (87.3)	10 (12.7)	0
③現在の自分は気に入っているか	72 (91.3)	5 (6.3)	2 (2.5)
④すぐに1つ大きくなりたいか	66 (83.5)	11 (13.9)	2 (2.5)
⑤早くお兄 (姉) さんになりたいか	69 (87.3)	10 (12.7)	0
⑥早く大人になりたいか	53 (67.1)	26 (32.9)	0
⑦どんなともしにでもなれるとすれば	赤ちゃん 7 (9.1)	おとな 29 (37.7)	今のまま 41 (53.2)
⑧1年前と今とを比べたとき	たくさん変わった 46 (61.3)	少し変わった 17 (22.7)	あまり変わらない 12 (16.0)

Table 8 「今の自分に満足しているか」の回答と QOL 得点 (SD)

	はい (n=72)		>	いいえ (n=7)		t 値
	M	SD		M	SD	
QOL 総得点	75.96	(10.85)	>	54.66	(21.53)	2.585*
精神的健康	72.57	(18.60)	>	45.54	(28.80)	3.485**
自尊感情	80.30	(16.57)	>	54.91	(31.96)	2.074†
家族	69.58	(17.82)		59.82	(23.06)	n.s.
友だち	75.19	(14.56)	>	56.25	(20.41)	3.169**
学校生活	88.37	(16.83)	>	58.93	(36.60)	3.890***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

で比較したところ、「今の自分を気に入っていますか(満足していますか)」で有意差が得られた。今の自分を気に入っている(「はい」と回答した子どもの方が、気に入っていないと回答した子どもよりも、家族得点を除く QOL 得点すべてにおいて高得点であった (Table 8)。

5. DAM グッドイナフ人物画知能検査からみた 精神発達と CAT の母子関係との関連

DAM グッドイナフ人物画知能検査の採点を行い、発達年齢が生活年齢よりも1歳以上点数が高いものは「高群」、生活年齢と比較して点数の上下差が1歳以内のものは「年齢相応群」、生活年齢より1歳以上発達年齢が低いものは「低群」の3群に分類した。「高群」は8名、「年齢相応群」41名、「低群」28名であった。精神発達年齢と母子関係の表象との関連を検討するために χ^2 検定を行ったところ、図版3と7のいずれの分類においても有意な差はなかった($\chi^2(8) = 4.787$, $p = .780$, n.s.; $\chi^2(8) = 10.783$, $p = .214$, n.s.)。母子関係の表象と精神発達年齢は関連がないことが明らかにされた。

IV. 考察

本研究では保育所や学童保育に通う子どもがどのような母子関係の表象を形成しているのかを投影法の幼児・児童絵画統覚検査 (CAT) から捉え、子どもの自己意識や QOL、精神発達年齢とどのような関連があるのかを検討した。

1. CAT に投影された小学生の母子関係の表象

母子関係をテーマに含む CAT 図版3と7の反応

を、駒田ら (2001) に倣い分類したところ、両図版とも該当者がいないカテゴリがあり、総カテゴリ数は駒田らよりも少ないものとなった。各カテゴリの反応比率は、図版3では肯定的関係が35.4%と最も多く、以下 Holding と否定的関係、願望が続いた。肯定的関係と Holding の母子関係安定群が54.4%と過半数に及ぶ点は駒田らの結果 (52.1%) と同様の比率であったが、否定的関係 (4.2%) と願望 (8.3%) は駒田ら調査では少なかった。次に、図版7では分離不安が46.8%と最も多く、分離・再会や母親不在がそれに続いた。分離・再会と肯定的会話を併せた母子関係安定群は30.4%に上り、駒田らの結果 (27.1%) と同様の比率であったが、駒田らでは“わからない” (37.5%)、要求拒否 (22.9%)、分離・再会 (20.8%) が多く、分離不安は10.4%と少なかった。

また、久保田、駒田らは詳細な分類を母子関係安定群とその他の2群に分けて分析したが、本研究では願望群が15.2%、分離不安群が46.8%と多いため、母子関係安定群に対立するその他群を一括りにすることに違和感があった。そこで本研究では母子関係安定群と非安定群の他に、図版3では願望群を、図版7では分離不安群をそれぞれ別に立てて3群で分析を行った。

これら反応比率の違いは、駒田ら (2001) の対象者が3歳児から4歳児であるのに対し、本研究の対象は小学校入学直前の5歳児から小学3年生までの児童前期の子どもであったことが影響していると考えられる。駒田らは3歳ではまだ母子関係を表象すること自体が困難な子どもが多いと考察している。

2. CAT 母子関係の表象と QOL との関連

CAT の反応と QOL 総得点ならびに下位領域得点の分散分析から、図版3の肯定的関係群の子どもは否

定的関係群の子どもよりも QOL 総得点が高かった。また下位領域の自尊感情も肯定的関係群と母親不在群が、否定的関係群よりも得点が高かった。これらの結果より、肯定的母子関係を投影した子どもは、否定的な関係を投影した子どもよりも QOL の総得点と自尊感情が高く心身ともに健全であるといえる。一方、母親不在群の子どもが否定的関係群の子どもよりも QOL の自尊感情得点が高かったという結果は次のように解釈できる。本研究では駒田らの基準に依拠して、図版3を母子関係に限定して分類したが、母親不在群の約半数は母親の代わりに父親と子どもの関係を語っていた。Bowlby (1969; 1973) は、養育者とのアタッチメント関係が健全な心身の発達につながると論じており、アタッチメント対象を母親だけに限定していない。父親と安定したアタッチメント関係を形成している場合もあるため、母親不在群の自尊感情得点が否定的関係群よりも高かったと予想される。

CAT 図版7の3群ならびに5群の分散分析多重比較の結果から、分離不安群は非安定群、肯定的会話群よりも家族の QOL 得点が低かった。分離不安群は非安定群の子どもよりも家族に関する QOL は低かったが、非安定群の要求拒否群のように母親に具体的な要求を示して拒否されるような投影を示しているわけではない。分離不安の反応は子どもの抱いている寂しさの反映と考えられる。

3. CAT の母子関係の表象と 子どもの自己意識との関連

CAT の母子関係の表象と自己意識の検討から、母子関係安定群のなりたい自分は「今のまま」「早く大きいお兄さんやお姉さんになりたい」が多く、肯定的関係の子どもも現在の自分に満足しているという回答が多かった。これら安定した母子関係の表象をもつ子どもは現在の自己への満足度が高かった。一方、非安定群や母親不在群の子どもは「今のまま」よりも「赤ちゃん」になりたいが多く、現在の自己への満足度が低く退行欲求を高めている可能性が示唆された。都筑 (1981; 1983) は自己意識の健全な発達には、子どもが自身の現在の生活と未来の生活の両方を豊かなものとして認識していることが重要であると述べている。安定した母子関係の表象は、現在や未来に目を向けた健全な自己意識の発達と関連していることが示され

た。

さらに図版7の母親不在と要求拒否は同じ非安定群に統合したが、「あなたはもう一度赤ちゃんになりたいですか」では正反対の回答が見られ、母親不在群は赤ちゃんになりたいことを望み、要求拒否群は望んでいないことが明らかになった。CAT の語りに母親が出てこない子どもは、赤ちゃんになりたい気持ちを抱えていることが示唆され、母親不在や要求拒否に関してより詳細な分析が望まれた。

4. 児童期前期の母子表象の特徴

CAT と QOL、自己意識との関連を検証した結果、安定した母子関係の表象を築いている子どもは QOL の総得点や自尊感情が高く、現在の自分自身および未来の自分に対する期待が高かった。一方、CAT の非安定群の割合は図版3に30.4%、図版7に22.8%みられたが、家庭外の友達や学校生活の QOL とは関連がなかったことから、投影法で捉えられる表象レベルと、意識的に口頭で答える QOL のレベルは異なることが推察された。加えて、CAT の反応と DAM グッドイナフ人物画知能検査とに関連がなかったことから、母子関係の表象の安定性は精神発達とも関連がないことが明らかにされた。

さらに、本研究の対象である学童保育の小学生の約半数が図版7で分離不安の反応を示し、小学3年生に至っても減少することなく分離不安群が50%に上った。分離不安は、Bowlby (1969) が提唱した近接性の維持、安全な避難場所、分離不安、安全基地の4つの愛着行動の1つであり、愛着対象との分離に際し苦悩し抵抗を示すことである。アタッチメントの発達過程 (Bowlby, 1969) は通常、3歳を過ぎると目標修正的協調段階に入り、愛着対象への IWM が安定化することにより、愛着は物理的近接から表象的近接へと移行して分離不安は漸減する。つまり分離不安は対象恒常性が確立するまでの子どもは誰もが経験する通常の発達の姿であるが、母親への対象恒常性が確立した児童期の分離不安は定型発達からの逸脱の可能性があると考えられる。もちろんここで言う分離不安は、投影法である CAT の反応の1カテゴリーであり、DSM-5 や ICD-11 の分離不安障害や分離不安症とは次元が異なる。また、分離不安群の自尊感情や家族、学校生活の QOL 得点は低い、自己意識は「赤ちゃん」への

退行欲求が強いわけでも現在の自分に満足していないわけでもなく、自己意識の発達はやや平均的であった。つまり、分離不安群は母子関係の表象が安定化する移行期にあると考えられる。そして本研究の対象である学童保育児に多い特徴の一側面と考えられた。

本研究の調査対象は、都市部へ通勤する共働き家庭が多い保育園の幼児と学童保育を利用している小学生であることから、日常生活において子どもが養育者と過ごす時間が短く分離が長い毎日を送っていると推察される。門の前で向き合う親子のリスを見て子どもが母親と離れるのを嫌がっているという語りの反応は小学生であっても家族ともっと一緒に過ごしたいという学童保育に通う現代の子どもの心の声を反映しているのではないかと考えられた。

以上の考察から、学校生活で特に問題のない子どもの中にも、母子関係の表象に不安定な要素を含んでいる子どももいると考えられる。小学校低学年が未だアタッチメントのIWMのレベルは発達の過程と考えるなら、特に学童保育児の支援やケアにおいてこれらの視点に基づく配慮は大切と考えられる。

5. 本研究の意義と課題

本研究の意義は、乳幼児や児童の母親の就労が当たり前になり、学童保育が増加してきた現代の社会情勢において、投影法を用いて児童期前期の子どもの母子関係の表象を検討した点にある。CATを用いた久保田(1995)、駒田ら(2001)の先行研究は今からおよそ20年を遡り3歳児から4歳児を対象としていた。本研究では先行研究よりも年長の小学校入学直前の5歳児から小学3年生までの保育児と学童保育児を対象としている。これらの点において本研究は今後の児童期の親子関係や発達研究、とりわけ今後も益々増加すると予測される学童保育児の心理的発達の理解と健全育成に資すると考えられる。

しかし、本研究の対象は保育所と学童保育所それぞれ1か所に限定した調査であるため、学童保育を利用していない児童との比較対照ができていない。対象者数も少なく、児童全般にあてはまるのか、あるいは学童保育児に特有の傾向なのかを本調査で結論付けるのは尚早といえる。愛着対象の表象を母親に限った点も十分とは言えない。今後の課題として調査範囲を拡げることが望まれる。

謝辞

本論文は第1著者が平成31年度に関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科へ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。本研究のために、ご協力いただいた子どもたちに心より感謝いたします。また、調査依頼に快く了承していただき、調査実施にご尽力いただいたこども園の職員の皆様に感謝いたします。

【引用文献】

- Bellak, L. (1971). *The TAT & CAT in clinical use*. New York: Grune & Stratton.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss. Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books. (ポウルビイ, J. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子訳 (1976). 母子関係の理論Ⅰ 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (ポウルビイ, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 (1977). 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版社)
- 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松崎くみ子 (2014). 子どものQOL 尺度その理解と活用—心身の健康を評価する日本語版 KINDL^R 診断と治療社
- Kerns, K. A. (2008). Attachment in middle childhood. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications (2nd ed)* New York: Guilford Press.
- 木村治生 (2009). 何が「家庭での学習」を促すのか—親子関係を中心に考える 第2回子ども生活実態基本調査報告書 https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2020/hon0_4a.html (2018年12月11日)
- 小林重雄・伊藤健次 (2017). DAM グッドイナフ人物画知能検査新版ハンドブック 三京房.
- 駒田閑子・別府 哲・宮本正一 (2001). 幼児における移行対象と愛着の発達 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, 50, 101-112.
- 小松孝至 (2003). 幼稚園での経験、友だち、保育者に関する母子の会話：話題と子どもの語り方についての母親の報告から発達心理学研究, 14, 294-303.
- Koot, H. M. (2001). The Study of Quality of Life: Concepts and methods. In Koot, M. & Wallander, L. J. (Ed.) *Quality of Life in Child and Adolescent Illness: Concepts, Methods, and Findings*. New York; Brunner-Routledge, 3-20.

厚生労働省 (2017). 国民生活基礎調査の概況

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/index.html> (2018年12月11日)

厚生労働省 社会保障審議会児童部会放課後児童対策に関する専門委員会 (2018). 総合的な放課後児童対策に向けて中間とりまとめ (平成30(2018)年7月27日)

<https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/gaiyou.pdf> (2020年9月1日)

久保田まり (1995). アタッチメントの研究 内的ワーキング・モデルの形成と発達 川島書店

内閣府 (2008). 青少年白書

<https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h20honpenhtml/index.html> (2018年12月11日)

内閣府 (2018). 平成30年版子供・若者白書 第4節 ワーク・ライフ・バランスの推進

<https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h30honpen/index.html> (2018年12月11日)

齊藤千鶴・佐伯素子・向井隆代 (2007). 幼児・児童絵画統覚検査 (CAT) を用いた幼児の家族・親イメージの実証的検討 (1), 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 10, 28-38.

Schipper, H., Clinch, J. J., & Olweny, C. L. M. (1996). Quality of life studies: Definitions and conceptual issues. In B. Spilker (Ed.), *Quality of life and pharmacoeconomics in clinical trials*. 2nd ed. Philadelphia, PA: Lippincott-Raven Publishers. 11-23.

柴田玲子 (2012). 小学生版・中学生版 QOL 尺度 子どもの科学, 13, 39-46.

Sroufe, L. A., Waters, E. (1977). Attachment as an organizational construct. *Child Development*, 56, 1-14.

谷口 清 (2016). アタッチメントの形成と脳-パーソナリティ発達のメカニズムを考える-心理科学, 37(2), 38-47.

戸田弘二 (1990). 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連 北海道教育大学紀要 1-C, 41, 91-99.

戸川行男 (1955). 幼児・児童絵画統覚検査解説 CAT 日本版 金子書房.

都筑 学 (1981). 幼児の自己意識の発達 教育心理学研究, 29, 70-74.

都筑 学 (1983). 児童の自己意識の分析 大垣女子短期大学研究紀要, 17, 72-78.

Zazzo, B. (1960). Le dynamism évolutif chez l'enfant. In R. Zazzo (Ed.) *Des garçons de 6 à 12 ans*. Paris: P. U. F. (ザゾ・B 久保田正人・塚野州一 (訳) (1974). 発動の力動課程 ザゾ・R (編) 学童の生長と発達 明治図書).